
魔術師の弟子

青野茉莉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術師の弟子

【Nコード】

N6699V

【作者名】

青野茉莉

【あらすじ】

プロット無しの行き当たりばったり小説です。小説を初めて書くので読み辛い点などあるかと思います。1 - 2はpixivに載せたものと同じです。

上級魔術師フェリス・J・ルシエンテスが厄介な友人に振り回され、これまた厄介な弟子を取るまでの物語です。強面で口も悪いがなんだかんだで最後は人の良い彼に安らぎの時は訪れるのか。

若旦那投げやりに嘆く。

1

美しく着飾り媚態を振りまく娼婦に男娼たち。目を欲望で濁らせた人々。金があればあらゆる快楽をむさぼる事の許された背徳の町クローバーストリート。

首都ハーデルクの西側に位置し、二重の門によって二層に分けられた町。手前には飲食店や劇場など、奥には高級娼館や後ろ暗い快楽を満たす店が軒を連ねている。奥に出入りするには専用の木札を持つ必要がある、ある程度の金と権力があるもの達のみが出入りを許されていた。

二重門の中の大通りに店を構える娼館おぼろ屋。過激なサービスよりも質の良い娼婦を取り揃える政府公認、150年の歴史ある老舗である。

一代目の出身地という大和風に纏められた店構えは、改築を重ねどつしりとした風格が漂ういつそ排他的ともいえる佇まいをしていた。

「さあて、どうしようか？」

店の奥にある私室にて若き亭主イスルギは手紙を読みつつ頭を悩ませていた。

「我が国と国交の深い某国の皇太子が某の店の（ようはうちの店だ）の娼婦をご所望なので、相手をさせよ。これは国からの命である。なにか不備があれば許可証の剥奪も覚悟せよ。とまあ、そんな内容だ。

「娼婦ならねー？話は簡単だったんだけどねー？」

はあため息をひとつ落とすが、表情筋が弛緩しているとしか言いようのない顔なので逼迫したようにはみえない。

「若旦那さま、よろしいですか？」

「ヘンリーか、入っていいよー」

襖をそつと開け入って来た老婆、この店で長年娼婦として勤め上げ現在は娼婦達のまとめ役兼教育係であるヘンリエッタ婆である。

「リリアはどうしてるー？」

「責任を感じてか鏡でにらみ合いつこしておりますよ」

「そつかあ。努力家だねえ。教養も技巧もほぼ完璧。見目は国でもトップに立ちそうなレベル。なんだけどねー」

「……当店の歴史にも残りそうな高級娼婦になれる資質の筈なんです」

二人の間にため息が落ちる。

「客に愛想笑いすら出来ない…その上、」

ヘンリエッタが思わず、言いよんだのを亭主が引き継ぐ。

「その上、まだ11歳で初潮も訪れていなんだもの。16歳童貞のお相手なんて絶対無理」

無謀であつた。せめて皇太子に女性経験があれば救いがあつたかもしれないが、皇太子はやや、異常ともいえるほど潔癖な質であるらしく、性的な事を毛嫌いしていた。

だが、王族しかも跡取りともなれば子づくりは重要な仕事なのである。嫌とかそんな事を言われたのでは国が滅びかねないと、家臣達は危機感をもつた。

そこで、少しでも女性に慣らそうと娼館での接待を行ったのが今から1ヶ月前。友好国での接待ならば皇太子もごねたりしないだろうと踏んだらしい。国でも一二を争う老舗名店の娼婦ならば興味くらは持つだろうとの腹づもりだったのだ。

結果としては成功だった。問題は彼女はまだ娼婦ではなかったこと。ついでに言うとお愛想笑いどころか、男の前だと表情がかけらも動かない男性嫌悪症気味な11歳であつたことである。

「困ったねー。店の事だけでも頭が痛いのに…。ヘンリー、そつちは相変わらず？」

「ええ、怖がつて店に入り浸るものが増えて常連客の中には不信に思い始めている方も出始めています」

問題はリリアの事だけでは無かった。ここ一週間ほど店の奥、従業員たちの生活区域で妙なものが姿を現し始めたのだ。

「曰く、白っぽい影のようなモノが風呂場の方に消えた。

「曰く、笑う顔だけが、廊下に浮かんでいた。

「曰く、長い髪の女が廁の天井の隅に張り付いてこちらを睨みつけていた。

など。細かいものを上げると切りがない始末であった。

ここ、亭主の私室付近でも謎の足音が聞こえる現象が確認されている。

「魔術師協会の連中は「結界は完璧だ。外部からの侵入などあり得ない」の一点張り。このまま客に気付かれでもしたら、おぼろ屋の歴史に泥を塗ることになります」

150年の歴史に加え現在客をとっている娼婦は100人ほどに見習い20人。娼婦以外の従業員が30余名とその家族。それらの生活がかかっているのだ。なおかつ娼婦達の多くは家族に仕送りをしているものも多い。最悪の場合閉店ともなれば結構な人間が路頭に迷う事になるだろう。

「ああ、頭が痛いねー」

万年床に横になり布団に頭をぐりぐりとこすりつける。まとまりの無い髪がますます乱れる。それを見てヘンリエッタが顔をしかめる。「若旦那！あなたがしつかりしないでどうするんです！大旦那様が療養している今こそ先導を取らねば下のものに示しが付きませんよ！」

「うー、めんどうだねー。：店の件は友達に頼んであるからすぐに片がつくと思うよ」。彼は有能だから」

顔を枕に押し付けたまま、若旦那がのほほんと云った。

「彼とは？誰の事です」

「魔術師協会所属上級魔術師フェリス・J・ルシエンテス。友達さ」

魔術師通常運行中

2

男が歩く。飾り気の無いローブ。足元は編み上げのブーツ。手元には櫂の杖。

魔術師である。

機嫌が悪いのか、凜々しいというには迫力がありすぎる三白眼がますます怖い事になっている。多くの客引き達も恐れ戦いて声を掛ける者は居ない。

ある店の前の入り口で男が立ち止まり、何かを考える様子である。

それを客引きや通行人達が固唾を飲んで見守る。

不意に男が動き、店に無造作に入って行く。ギャラリーはほっとした様にそれを境に、何事も無かったかの様に動き始めた。

店の名は大和文字でおぼろ屋、とあった。

「おう。ちょっといいか」

愛想のかけらも無い、機嫌の悪い事を隠そうとしない様子で男が上がり口で声を掛ける。

丁度店の奥から従業員らしい中年男がやってくる。

「へえ。なにか御用っ…ひっ」

真っ正面から凶相と目を合わせてしまい、客商売ならぬ悲鳴を上げかけた。その後はなんとかプロ意識で立ち直ったようだ。

「そ、それで、どんな子がお好みで？今の時間でしたら、比較的安くで遊べるのがそろってますよ。もっと質の良い方が良い場合は少々お待たせしてしまいますが…」

「女を買いに来たんじゃねえ」

ずらずらと手元の姿絵を開こうとする従業員の長舌を遮ると男は目元をますます怖くする。その言葉を聞いて店の奥の男達が緊張するのが分かった。

「ふん。質の良いのを揃えてんな。流石はあいつの店らしい。」

目の前の男が客では無いと知り中年男から愛想笑いが消える。さりげない様子で近くに居た娼婦達を店の奥に引っ込めさす。

「…ここの亭主に会いに来た。フェリス・J・ルシエンテスだ。聞いてないのか？」

「は、……あ、ええ、ええ！魔術師協会上級魔術師の！聞いております。いやあ。お話よりもお若くらしやいますので気付きませんで。ええ！」

愛想笑いの大盤振る舞いに揉み手まで付いた。

「ささ。店の奥までご案内いたします。わたくしは番頭をさせて頂いてます。ガストン・ボールと申します。以後お見知りおきを」

「うぜえな。このじじい。」

ちつと絞めてやろうか。などと不穏当な事を考えつつ、黙って付いて行く。

途中用心棒らしい男達とすれ違うとこちらをじつと見つめてくる。

「？敵意は感じねえ。これは…恐怖？」

妙に縋り付いてくる様な視線を感じ、先日送られてきたイスルギからの手紙を思い出す。

「やあ、久しぶりだね？元気かい？」

僕は元気だよと言いたい所だけど、父は寝込むは、店では変な事が起こるしであんまり元気じゃあないんだ。

今うちでは色んな奇怪な事が従業員達の居住区で起こっててね。皆怖がってしまつてね。このままじゃ、営業にも支障が出そうなんだ。まあ。命に関わる様なことは無いんだけどね？確か君、もうすぐ長期休暇だろう？暇つぶしにでも一回様子見に来てよ。美味しい酒を用意して待っているからさ。待つてるよ。イスルギ・クルト

「なにが命に関わりがない、だ？あいつの事だ。裏があるってみて間違いないだろう。」

10代に出会って以来、やつに聞かるといつも厄介な事ばかりに巻き込まれて来た。今回の手紙にしても嫌な予感しかしなかった。あいつの持つてくる話は厄介な癖に最終的には絶対に逃れられない話ばかりだ。

しかし… なぜかこの件はすぐに受けるべきだと、思ったのだ。なぜかそう思った。

足が止まった。止めるしか無かった。目の前の光景に飲まれる。

「これは、なんだ？」

頭が二つ付いた甲殻類。人面コウモリ。青い舌を垂らした犬。さめざめと木に首を吊った状態で泣く女。そこには無数の異形が蠢いていた。

店の奥。中庭に面した3階建ての建物が従業員用の居住区。だか、客の目を楽しませる筈の庭園は阿鼻叫喚というか、人外魔境といった状態であつた。

「はい？ ああ、良い庭でしょう。大和から職人を招いて作らせた当店の自慢…」

番頭の庭自慢など頭には入ってこない。ーという事はこれは通常の人間には見えてないってことか。こんなもんが見えていたら発狂しかねない…か。

「ああ、良い趣味をしている。なあ、イスルギ？」

中庭の東屋で待ち受けていたおぼろ屋亭主、イスルギ・クルトに嘆息まじりに皮肉をぶつける。

「やあ、いらつしやいー。思ったより早くて嬉しいよー」

緊張感のかけらも無い笑みを浮かべイスルギが言う。

「ガストン。ここからは私が説明をするから店に戻って」

「はい。若旦那。失礼をします」

イスルギとフェリスに一礼をすると番頭、ガストンはそそくさと店に引っ込んだ。

イスルギはフェリスに向き合つと、

「これを君はどう思うー？」と聞いた。

「どう、だと？どう見ても結界内部で魔力が垂れ流しにされたせいで異界化が進んでんじゃねえか。アホか、娼館の亭主になったせいで唯一の特技すら鈍ったのか？」

結界に異常がない事は店の入り口で確認済みだった。この店は霊的魔的なモノの侵入を許さない完璧な状態を保っている。逆に言えば決して出さない閉じられた状態である。

「鈍ってないよー。ばつちり見えているよー。いやあ、グロいよねー？」

あははーと平然とした様子でイスルギは言う。彼は様々な異形のモノを見る。見てしまう。見る事は見られる事。異形を見続けたせいで異形に目を付けられ、そのせいで10代の頃フェリスの師である魔術師の元に避難していた事があるほどに。

軽いお被い位なら今でも出来る筈だ。ならばなぜこんな状況になるまで放置して居るのか。

「お前なら、この状況を魔術師協会にも説明出来る筈だ。いくらあそこがお役所仕事でも、原因追求位はするだろう。なのになぜ、俺を呼んだりした？」

「これらが現れ始めたのは1週間ほど前から。原因は分かっているよー」

イスルギは淡々とんでもない事を言っている。

「一週間だと？ありえない。こんな状態になるには相当な魔力をぶちまけないとこうはならない」

これは魔術師協会に報告義務が生じるほどの濃度の魔力汚染だ。この規模の事故や事件が起こったなら一週間も放置していられないはずだ。しかも原因が分かっているとイスルギは言っているのだ。

「ありえるんだ。君なら分かる筈だよー？」

フェリスを試す様にイスルギが問う。

「一週間……ここしばらくでそんな大規模な事故や事件の記事は読んでないし聞いていない。魔術師協会がこの結界を調べた定期検査

の際にも店の異常も報告されていない。

だとすれば、少しづつ、誰にも気付かれないほど微量な魔力が長期間でしみ出したのが原因か？

「……お前、俺に何をさせる気だ？」

「流石だねー。原因に思い至ったようだねー。君にしてもらいたいのは教育だよ」

「教育？誰のだ」

警戒心を強め、逃げる算段を考え始める。

「11歳。将来有望な美少女だよー。興味出て来たでしょー？」

「断る！」

「そういう訳にはいかないんだー。これは国も絡んでいる問題でねー？君が教育係に任命されているのは魔術師協会も了承済みだよー？」

「……おい。まて。お前最初から？」

「あははー。幹部メンバーは知ってたと思うけど何も伝えて無かったんだねー？」

急にとらされた長期休暇。都合良く来た手紙。けれど、幹部連中が彼に怯えているのはいつもの事だからそんなに気には留めてなかったのだが甘かった。

「この状況も協会は分かっているんだな？」

「もちろんさ。だからこそ扱いに困ったらしくてね？僕と古い友人である君に白羽の矢が立ったと言う訳さ」

「いやー僕としても身内にも詳しい事情を話せないし、心苦しくてねー。などとうそぶいた。」

あまりのろくでなしさに言葉も出ないフェリスを置いてどんどんと話を進めて行く。

「問題の子は今、病気の療養中って事にして僕の私室の隣に住まわせているよ。早速会いに行こうー？」

「お前……これが終わったらただじゃ済まさんからな……？」

「ついでに幹部共もだ。絶対絞める。黒々しい雰囲気を纏いながら

低く呟いた。

「もちろんさ。…すべて覚悟の上だよ」

不意にイスルギが呟いた。誰に聞かせる為ではなく己の覚悟を確かめる為に。

フェリスには幸か不幸か聞こえなかったようだった。

美少女非常に驚く

3

三階建ての従業員用に隣接した、二階建ての家。従業員用はあくまで大勢の人間を機能的に住ませるのを目的として作られている。高い生け垣で囲われ一見するとそこには無い様に見える家屋。

「変な作りだろう？これを建てたのは4代目、僕の祖父なんだ。なんかさー娼婦達に恨まれているって思い悩んで、いつか殺されるっていつも怯えていた。だから人が出入りしにくい構造にしたんだって。娼婦達は店の方でそのまま寝ているしね」

「平然と女を売る方が変だろ。多少は罪悪感があって当然だ」

「まあねー？僕自身幼い子とか身体の弱そうな女が売られてくると罪悪感くらい感じるよー？」

「…碌な死に方しなさそうだな、お前」

まあねー？と笑いながらイスルギは凝った意匠の彫られたドアを開ける。店や従業員用と違ってここは大陸、西欧風のデザインだ。

「さ、入って。問題の子は二階にいるよ」

屋敷に入ると一見地味だが階段の手すりや窓枠には玄関のドアと同じ意匠が施されていた。調度品も品が良い。

「性格うんぬんはともかく趣味のいい感じだったらしいな。」

口にするのは何となしに不快なので黙って二階まで付いて行く事にした。

二階は一階とは違って大和風の作りになっているらしい。

「リリアー。私だ。入っても大丈夫かい？」

一応紳士的に障子越しに声を掛ける、とか細く「はい…」という声が答えた。

そっと障子を開けるとカーテンが開いているのか強い光が差し込んだ。一拍の時間を置いて目を慣らすとイスルギの肩越しに人形があっ

た。

「ちがう。これは、

「…人間…か？」

一見すると人形のような少女がベルベットの敷かれた椅子に座っていた。

豪華な衣装は確か振り袖というのか。深い紅色と黒が見事だ。おぼろ屋の女達が纏っているものと似ているが少し違う気もする。長い黒髪と印象的なのは瞳であった。鮮やかな天色。空の色だ。息を飲むような美少女だ。人形的と表現出来そうなほどに。

「フェリス。紹介するよ。リリアだ。かわいいだろ？」

「っ。…可愛いのは認めるが可愛げはなさそうなガキだな」

「ええー。素直じゃないなー。一瞬見とれていたくせにー」

「頼むから肘でつつくのをやめろ。本当に殴りたくなってくる。」

絡んでくるイスルギを押しつけて部屋の中に入ると、リリアが驚いた様に椅子から立ち上がった。

「あ、のっ。ごめんなさいっ」

のっけから謝られてフェリスが面喰らった様子で立ち止まる。

「わた、私の、せいで…みんなにめ、迷惑を…いっぱい、お、おにいさんも…あ」

言葉を発しようとするがうまく言い出せずあげく段々に泣き出してしまった。

「あー、いや、…あー」

どう対処すればいいのか。悩んだのは一瞬。頭を掻きむしると、ためらいを振り払う様に部屋の中を押し進み、おもむろにリリアの頭を掴んだ。

「えっ、あえ、はえ？」

「………あー、あれだ。うん。お前、ちょっと泣き止め」

あまりの事に泣き止んだリリアの頭を掴んだまま、目を合わせる。

「………っ」

「………」

しばし無言で見つめ合う二人。耐えられなくなったのはフェリスの方であった。

リリアの頭を豪快にかき回す。たちまち見事な黒髪は鳥の巣もかくやという惨状に見舞われた。

「わーっ。やだあ！ねえさまに整えてもらったのに！」

人形めいた様子が一変し年相応の普通の少女がそこには居た。

「そっちの方が、可愛いじゃん。…俺の名はフェリス・J・ルシエントス。お前の師匠様だ。よろしくな」

「うんつと。は、はい！えっとリリアです。よろしくお願いします

！お、お師匠さま！」

髪を懸命に手櫛で直そうと苦戦しつつ、きちんと頭を下げ元気よく挨拶をする。

手を離れた拍子に髪が乱れたのはご愛嬌である。

「ほい。握手。髪悪かったな」

「え、あと。はい！大丈夫です！」

左手同士で握手をすれば、仲直りだ。

「よーし。仲直りと自己紹介も思った所で次の話に進もうかー？」

拍手をしながら部屋に入って来たのはイスルギと見知らぬ女が一人。

「あ、ねえさま！」

「ねえさま？誰だ？」

「お初にお目にかかります。わたくしはリリアの教育係のビオラ・ローレンスと申します。以後、お見知りおきを」

婀娜つぽく、微笑んだ女を見てフェリスは喰えなさそうなのが増えたと内心ため息を付いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6699v/>

魔術師の弟子

2011年10月9日13時32分発行